



# 起立工商会社

～明治期の有田焼を世界へ～



起立工商会社ニューヨーク支店  
(Yamanaka & Co. 提供)

明治期の日本で、当時の伝統工芸品などを海外へ輸出した起立工商会社は、元佐賀藩士であった松尾儀助らが設立しました。『明治事物起原』には起立工商会社について「名義は会社とはいへ、今日のいわゆる合資または株式会社の性質にはあらず、ただ兩人組合の意味に過ぎず。内務省に請ふて、その許可を得、かつ補助を仰ぎ、七年十一月三日、京橋竹川町に始めてその店舗を開けり」とあります。

最近では、県内の上峰町で「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として平成29年3月に「一般社団法人起立工商協会」が設立され、また嬉野市でも嬉野茶の製造、販売などを手掛ける「起立工商会社」が昨年設立されています。いずれも、明治期の起立工商会社を意識したネーミングのようです。

松尾儀助は天保7年（1836）10月、父儀八、母スマの子として生まれました。彼の履歴書によれば儀助7歳の時に父が死去。その後、伯父野中元右衛門の養育を受け、慶応元年（1865）より外国貿易に従事し、長崎港で茶業に着手しています。

明治6年（1873）にはウィーン万国博覧会事務局より出張事務官随行を命じられ渡欧。明治8年（1875）に日本の優れた美術工芸品を欧米へ直輸出するために貿易会社・起立工商会社（社長松尾儀助、副社長若井謙三郎）の設立を内務省へ申請し許可されました。創業に際して「事務局保障に相立、会社資本の所へ金3万円」を「三井組より借入の約定」で融資がなされました。その後も、度々政府からの「準備金貸与」が行われました。明治7年（1874）には東京銀座竹川町に本社を置き開業式を行い、同9年（1876）には米国ニューヨークブロードウェイ街に支店を構え、さら

に同11年には仏国パリ・ブルハール街にも支店を開設しました。

取り扱ったものは焼き物、漆器、銅器、織物から扇子、団扇など多岐にわたり、会社内に製造場を設けて当時の各界一流の職人に製作させました。また有田焼も香蘭社や精磁会社の製品なども取り扱っていました。

また、社員には佐賀藩出身でイェール大学出身の八戸欽三郎や執行弘道、大塚琢造など選りすぐりの人材を集めていました。ところがニューヨークやパリの支店は次々に譲渡され、同24年にはついに東京の起立工商会社を閉店しました。

宮地英敏九州大学准教授はその著書『経済学論集・起立工商会社と政府融資』の中で、華々しい活躍を見せた起立工商会社の破たんの原因を「為替リスクや在庫リスクを考慮せず、市場調査も十分に行わず、杜撰な経営に陥っていた点こそ、政府の政策が変化した際に対応できない、企業としての弱点を抱えていた」と述べています。

いずれにしても、明治期の有田焼をはじめ、優れた日本の工芸品を世界に輸出した起立工商会社の功績は忘れてはならないと思います。（尾崎葉子）

#### 参考資料

- ・「佐賀盛友会概況記」 1898年刊
- ・「紐育日本人発展史」 1921年刊 ニューヨーク日本総領事館
- ・「ウィーン万国博の研究」 1999年刊 関西大学経済政治研究所
- ・「起立工商会社工芸下図集 明治の輸出工芸図案」 桶田豊次郎編 1987年刊
- ・「経済学論集・起立工商会社と政府融資」（経済学論集）宮地英敏著 2006年刊
- ・「政商 松尾儀助伝 海を渡った幕末明治の男達」 田川栄吉著 2009年刊
- ・「ハウス・オブ・ヤマナカ ～東洋の至宝を欧米に売った美術商」 朽木ゆり子著 2011年刊

皿 季刊 山

No.118

夏  
2018

有田町歴史民俗資料館・館報

# 幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其六

有田の一時代を築いた豪商

## 田代 紋左衛門

(文政9年～明治33年2月2日)



(手塚家提供)

との戦いの日々でもありました。(文中敬称略)。

幕末から明治にかけて、油商人から身を立て、窯焼き、商人として海外貿易を手掛けて一世を風靡した田代紋左衛門。その84年の生涯は佐賀藩との攻防、有田内外山のライバル

田代紋左衛門は有田最大の災害であった文政11年(1828)の大火の2年前に、父慶十、母マツの長男として生まれました。後に弟の一人・祐右衛門は川崎家へ養子にいき、もう一人の弟・慶右衛門は長崎を中心とともに貿易事業を展開することになります。

有田焼は17世紀中ごろから最初の海外貿易ブームがあり、天保時代になると久富家がふたたび佐賀藩から貿易を許可されています。

当館には1200点余の田代家文書が寄贈されていますが、その中の嘉永2年(1849)の資料では陶山神社脇(当時は八幡宮)にあった白焼登4番、19番をかたに金20両の申し出を、辰十から油屋紋左衛門宛てに出したものがあり、このころの田代家の本業は油屋だった可能性があります。

その後、次第に家産が増していき、白焼登を所有して窯焼きとなり、貿易商人としても活躍していきました。安政3年(1856)11月、佐賀藩から貿易の許可を得ています。さらに、万延元年(1860)、それまで数度にわたり直接売り込みの願書を提出し、同年12月、異国向け陶磁器販売の許可を得ました。このころはまだ久富家とともに貿易に従事していたようです。

慶応2年(1866)には他領である平戸藩の三川内の素地に赤絵付けしたことが問題視され、長男助作が代官所に引き出されるという事件が起こりました。さらに田代の依頼で赤絵付けをしたということで当時の赤絵屋で北島源吾、辛島弘助、古田森吉らは青竹閉門に処せられています。この時の證文覚と思われる資料

があります。そこには染付薄手奈良茶、台皿付を13揃で370組、三川内の窯焼きと思われる福本喜左衛門と金氏佐吉に注文しています。

慶応3年(1867)、田代屋は上海に進出。また同年フランス・パリ万国博覧会に佐賀藩が出品した折、佐野常民の書簡には「皿山へ、日本向き唐様の上品は勿論、第一当地の田代・久富の両支店へ相囲みおり候西洋向きの品を沢山御仕向けに相ならず候ては相叶うまじく」とあります。それで、長崎にあった両支店に在庫していた有田焼を大量にパリへ発送する必要があるとし、さらには「田代紋左衛門の所に凡そ一万両ほどの品を即今持ち合わせ」とあって、今回買い入れる焼き物の代金は即金で決済する必要もないだろうという藩の思惑も見え隠れするほどの商いを行っていました。

その後、風雲急を告げる明治元年(1868)、八代深川栄左衛門らから佐賀藩に出された願いが受理され、田代家以外の9軒にも海外貿易を許可されたことが『肥前陶磁史考』にあります。また同書には、弟慶右衛門と協力して益々貿易を伸ばし、外国相手の田代屋の信用がゆるぎないものであったことも記しています。明治9年(1876)には、これまでもたびたび紹介してきましたが、長男助作が外国の商人をもてなす建物として異人館を建設しています。ただ、この建設に対しては父親として、当時すでに不況の波が押し寄せていたこともあって、見合わせるようにと苦言を呈しています。

明治10年代には一般食器以外の碍子(当時はインシュレートまたは電碗と称していた)の生産にも取り組み、明治19年(1886)には中国(当時は清王朝)から碍子の注文を受け、助作も上海や天津に出張しています。しかしながら同年9月、農商務省山形有朋大臣宛てに専売特許を申請しましたが不許可となりました。さらに同23年(1890)2月、父に先立ち助作が死去しました。翌24年には佐賀県を通じて朝鮮王朝用の緑釉瓦の製造を行い出荷しましたが、不具合が生じて大きな損失を被りました(館報No84参照)。

斯くして、一世を風靡した田代商店、田代屋は焼き物の商いから薬局の経営へと代わっていきました。しかしながら、今日、世界各地に「肥前山信甫造」の銘を持つ有田焼が存在することからも、いかに田代の有田焼貿易が盛んに行われたかを窺い知ることができません。

8月には佐賀県立九州陶磁文化館でこの田代家と久富家をテーマに「有田の豪商展」が開催されます。是非ご覧ください。

### 【参考資料】

- ・「肥前陶磁史考」 中島浩氣著
- ・「田代家文書」
- ・「有田町史 陶業編Ⅰ」

有田内山伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）は、国から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。地区内で実施している修理事業などについてご紹介します。

### ●伝統的建造物等の修理事業について

有田内山伝建地区は、岩谷川内の下の番所跡（眼鏡橋付近）から泉山の口屋番所までの約2 kmの間で、15.9haの範囲となっています。地区内には、重要文化財（建造物）や歴史的な資産として指定を受けた160棟の伝統的建造物（以下、伝建物）と地区の景観に彩りを添えるトンバイ塀など130件の環境物件が混在し、有田内山らしい歴史的な景観が形成されています。

地区内では、指定を受けた伝建物の修理事業が毎年計画的に進められ、将来に向けて保存・活用していくことを目指し取り組んでいます。これら修理事業は、建物の所有者と設計者、施工者、行政担当者が事前に

十分な話し合いをしながら、工事の計画を立てます。具体的には、その建物の形式や意匠、工法、材料等を十分に検討して、文化財の建物としての価値を維持・回復するように努め、外観を元の伝統的な姿に戻していきます。また、これらの計画は同時に構造補強や防火性能の向上なども行いますが、文化財の建物でも、現代的で快適な居住空間を確保するため、「建物内部の改装等は比較的自由にできる」ことになっています（重要文化財等は内部も復原の対象になっています）。

修理事業を実施する場合、費用の一部について助成を行っています。主屋の場合、費用の10分の8以内で、最高600万円が助成されますが、付属屋や環境物件では助成限度額が異なります。また、助成を受ける際は、一定の時期に一定の手順で事務手続きなどが必要となります。助成の内容や手順などについてはお問い合わせください。

なお、29年度に実施した保存修理事業は次のとおりとなっています。（旗島史郎）

#### ◎赤絵町・蒲地豊家 屋根葺替、外壁改修、建具取替

軒先に雨漏りがみられ、外壁の漆喰に亀裂があり、建具はアルミサッシのところがありました。そのため屋根葺替、北面や西面の外壁の修理を行い、木製建具を修理・修復しました。



Before



After

#### ◎大樽・村島保家 屋根葺替、外壁改修、建具取替

内部の天井板に雨漏りがみられ、また正面外壁は銀行として使用していたため、タイル張りとなっていました。セメント瓦の葺替と古写真や痕跡をもとに正面外壁の復原を行いました。



Before



After

#### ◎中の原・正司敬家 屋根葺替、外壁改修、建具取替

セメント瓦、粘土瓦の老朽化が激しく、壁も杉板が一部欠落しており、建具のほとんどはアルミサッシに変わっていました。そのため、屋根葺替、外壁改修、建具取替を行いました。



Before



After

### ●お問い合わせ

規制の内容や地区の範囲、修理事業等に伴う助成内容等については、有田町教育委員会文化財課まで、お問い合わせください。 電話 0955 - 43 - 2899



## 唐船城築城800年記念事業 記念講演会を開催しました

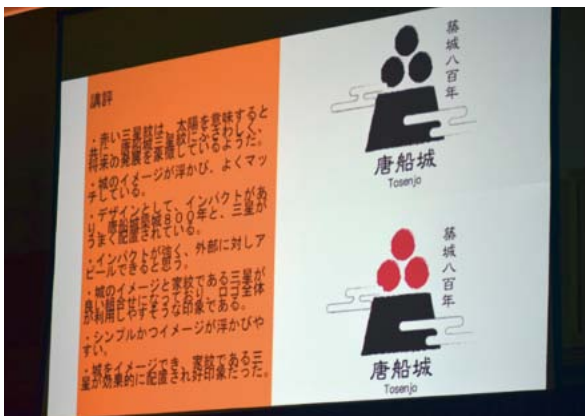


記念講演会の様子

昨年度の3月24日に「唐船城築城800年記念事業記念講演会」が焔の博記念堂で開催され、町内外から約300の方が足を運び参加されました。

記念講演会の講師には、奈良大学教授で城郭考古学研究の第一人者でもある千田嘉博氏にお願いしました。当日は、鎧武者に扮した松浦党有田氏武者隊の先導で登場し、客席の間を通過して登壇しました。「中世城郭と唐船城」と題した講演では、全国の様々な城郭の変遷を発掘資料や絵画資料でわかりやすく、時にユーモアを交えつつご講演いただきました。また、実際に唐船城を踏査していただいた結果を踏まえ、唐船城に遺存する遺構から当時の姿も考察されました。さらに、今まで地元の方も気付いていなかった、唐船山の南側に残る痕跡から南側の遺構の存在も考察され、より一層800年記念への機運が盛り上がったように思いました。

記念講演会では、他にも講演の前に今後800年記念をPRする上で旗印となる、ロゴマークの発表も行いました。



ロゴマーク発表



## 明治維新から150年！ 「明治有田偉人博覧会」を 開催します

今年には明治維新、慶応4年＝明治元年（1868）から数えて150年ということで、佐賀県内はもとより国内外で様々な取り組みが行われています。

幕末・明治という日本にとっての大変革期に、有田でも多くの先人たちが活躍し、今の礎を築いています。有田焼という産業を中心に見ても、デザインが革新され、華やかで精緻な製品が世界各国で開催された万国博覧会で名声を得ました。

この時期の有田では焼き物業界のみならず、教育、政治、芸術などあらゆる分野で忘れてはならない先人たちが活躍していました。

そんな「人」や「志」に学び、今に生かし、未来に引き継ぐ事業を行います。

町内各所では「わが家の明治・わが先祖（仮）」や町民向けのガイド付きバスツアーなどが計画中です。また、当館や有田陶磁美術館でも、それぞれ「幕末・明治の万国博覧会展」（仮）や「明治のもてなし展」（仮）などの企画展を開催する準備を行っています。主として秋の季節が各企画の実施期間となりますが、どうぞご期待ください。



(近藤コレクション)



「明治有田偉人博覧会」  
ロゴマーク

「明治のもてなし展」(仮)  
展示予定作品



(蒲地コレクション)

## 季刊『皿山』

通巻 118号 (平成30年6月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>